



■チェルノブイリは非常に大きな問題です。ベラルーシはチェルノブイリの実験場になっている。未来の中に投げ込まれているのだけれど、国民の意志は止まったままです。このために外国から批判され、孤立したままになっており、国は実際停滞しています。

チェルノブイリの影響で病気が増えている。チェルノブイリの問題は遺伝的に世代を越えて現れると言ってもいいでしょう。ベラルーシの国民は遅れてきた国民、独立した国民として、発達もしていない。独裁的な大統領を選んできました。そういうことでも、遅れた国民であると言えるでしょう。

チェルノブイリは忘れられつつあると言われていますが、そうではないと思います。未来の物語と言われているチェルノブイリは、そのまま現実に理解されていないのです。チェルノブイリによって、過去と未来、外国と国内という二項対立が成り立たなくなっています。

放射性物質の被害によって、ベラルーシの国内外、そして、将来何世代も影響を受け続けます。ベラルーシは一番大きな被害を受けたことになりません。

チェルノブイリは新しい挑戦です。それまでに蓄積していた戦争、悲惨な体験、その他の知識は挑戦に対して何ら助けになりません。

チェルノブイリと言うものを、広い意味で捉える必要があります。原子力、そして、政治、医学的にだけではなく、

□チェルノブイリの汚染地帯、地図から消された埋葬の村を歩いているとまるで電氣を使っていないお年寄りが戻ってきて暮らしている。大都市では、電氣をふんだんに使っているが、自然に囲まれて質素だが豊かに暮らしている人たちを見てきました。

その人達の暮らしが一夜にして壊れてしまったのですが、スベトラナさんは、この不公平感についてどう思いますか。

■不公平はあると思います。というのは、農民は昔から自然に暮らしてきて、鋤や鍬を使って暮らしています。現在の物質、唯物論的生活にまったく関係なく暮らしています。しかし、ベラルーシの汚染地に200万人が住んでいて、その内50万人が子どもです。そして、もつとも汚染のひどかった500

我々ひとりひとりの世界観として捉えることができます。見た目はこれまでの世界と変わらないように見えるのですが、人間と自然、これまで人間は自然と共存して生きてきたのですが、自然が人間に牙をむきだしている、そういった問題と向き合っています。

生態系が変わってしまったということです。放射性物質は、目に見えない、においもしない、手で触ってもわかりません。人間の感覚器官が人間の助けにならないのです。文明と人間の蓄積してきた科学が人間の助けにならないのです。汚染地の人々はこの状況を見たことがない。人間が作ってきた文明を人間自身ができることもできないわけです。

チェルノブイリが多

の町村から移住が行われました。政府が国際的に孤立して、補償ができませんから、他の国のNGOなどから支援を受けているのですが、それは十分ではありません。

□アレクシエービッチさんより汚染地帯を歩いた物語をお聞きます。

■先ほど申しましたように、日本人、ベラルーシ人は類まれな経験を持っていません。核戦争は原子力の平和利用ではありません。ウクライナ・ベラルーシの体験は、平和利用の原発による被害です。

ベラルーシにまき散らされた放射性物質は広島型原爆の250倍、たと言われています。放射性物質の半減期は、数千年、数万年、ものによっては数十万年になります。人間と放射性物質との戦いが、今もこれから数万年も続くと言っています。

くの哲学的問題を引き起こしています。キリスト教には、人間は万物の霊長という考え方がありますが、チェルノブイリ以後はその考え方が覆されました。

移住の時、人々の乗ったバスを置き去りにされた豚や牛がじっと見ている。私もそういう人々の話を聞きましたが、目を合わせるのが恐ろしい。動物を残していくとき、その目はとても



講演の翌日、アレクシエービッチさんと通訳竹内さんを松本城にご案内